玉成幼稚園　とうきょう　すくわくプログラム活動報告書　２０２４年度

１．活動のテーマ

＜テーマ＞

自然との関わり＜わくわくビオトープ＞　　（通称：めだか池）

＜テーマの設定理由＞

いろいろな生き物と出会い、見たり触れたりすることにより、命の大切さ・命の尊さ・思いやりの心・安らぐ心が育ち、自然事象に興味・関心を持ってほしい。

２．活動スケジュール

★玉成幼稚園ビオトープ造成授業

①土の中の生き物を見つけよう	10 月 15 日(木)10：00～11：30
②ビオトープに砂利を入れよう	10 月 23 日(火)10：00～10：20
③ビオトープの陸地部分を作ろう	10 月 23 日(火)10：30～11：30
④ビオトープに芝生をはってみよう	10 月 28 日(月)10：00～10：20
⑤生き物をビオトープに入れよう	10 月 28 日(月)10：30～11：30

３、探求活動の実践

＜活動の内容＞

・活動のために準備した素材や道具、環境の設定

・活動中の子供の姿、声を、子ども同士や教師との関わり　等を記載してください

①土の中の生き物を見つけよう

内容：ビオトープ造成予定地の花壇の植物の撤去・土の堀起こし作業で掘り出した地表性・土壌内生物を観察する

準備：汚れても良い服・帽子・スコップ・バケツ・手押し車・ブルーシート・観察箱

環境設定：花壇の中の生物を発見しやすいように、花壇近くにブルーシートを敷き掘り出した土の観察コーナーを設定する。見つけだした虫や生き物を観察しやすいように観察箱を用意。生き物を観察し終わった土を、子ども達の力で残土置き場に運べるよう、手押し車やバケツを予め用意する。

②ビオトープに砂利を入れよう

内容：ビオトープ内に砂利を入れる

準備：汚れても良い服・軍手・帽子・スコップ・バケツ・手押し車・砂利・カップ
ブルーシート

環境設定：ビオトープに砂利を子ども達がビオトープに運べるようカップとバケツを用意。
予め、砂利を強く握らない・砂利を投げない・砂利を入れるときは優しく入れるなどの注意を子ども達に知らせる。

③ビオトープのスロープを作ろう

内容：ビオトープの陸地部分の造成・荒木田法面形成(荒木田土スロープ形成)

準備：汚れても良い服・帽子・スコップ・バケツ・手押し車・ブルーシート・キヌタ
荒木田土(田土・赤土よりも粘土質が強く重い土)

環境設定：荒木田土が重たいので、子ども達の力でも運搬できるよう、重たい時は量を減らして運搬するなど配慮。きぬたで叩く時は周りとの間隔をあけて作業する。

④芝生をはってみよう

内容：芝はり作業

準備：汚れても良い服・軍手・帽子・スコップ・芝生マット・じょうろ・水

環境設定：子ども達が芝マットを均等に置くことは難しいので教師が側につき手助けする。

⑤生き物をビオトープに入れよう

内容：水草植栽・水生生物の放流

準備：汚れても良い服・軍手・帽子・スコップ・観察箱

環境設定：水草の植栽・水生生物の放流の前に、水草や生き物の名前を知ったり、じっくり観察出来る時間を十分にもち、小さな自然との関わりを存分に持てるように配慮した。植栽・放流の際は、投げ入れない・素手で触らない等の約束事を確認した。

※活動中の子供の姿・声・子供同士や教諭との関わりについては別紙エピソード記録参照

４、振り返り

＜振り返りによって得た先生の気づき＞

子ども達が実際に生き物と直接触れ合う機会があったのは①と⑤であった。①では、今まで花壇として植物が植えられていた土が掘り起こされ、ブルーシートの上に広げて昆虫やその他の生き物を探して触れ合う姿があった。子ども達の中には、園庭のバタフライガーデンに生息する蛾や蝶の幼虫を捕まえて羽化する様子を観察したことがある子や、園庭でバッタを虫取り網と籠を持って捕まえる姿が春先から続いており、そのように生き物への関心がある中でのビオトープ造成活動の実施であった。

②～④は、実際に花壇が実際に池に作り替えられていく過程である。砂利・スロープ・芝をはる作業を子ども達自身が行う事ことで、生き物がどのような場所を好み、生息しているのかを知る機会となった。

子ども達との造成活動日以外でも、業者さんが約１か月造成作業していた。日頃の保育の中、慣れ親しんだ園庭での作業だった為、子ども達の視野に入る中での作業だった。その様子に興味をもった子ども達は「今何をしてるの？」「それはなに？」と業者さんに直接質問出来る機会が常にあったり、業者さんの作業によって出てきた虫がいないかと子ども達が自ら虫探しを楽しむ姿もあった。

⑤では実際に水が張られビオトープが完成した。もともと花壇だった場所が池になった様子を見ながら次第に期待の気持ちが高まったり、やっと水が張られたという嬉しさを表現している子ども達の姿があった。

ビオトープを造成した場所は園門近くのブランコ前の花壇で子ども達が慣れ親しんだ場所だったという事もあり、もともと花壇だった場所がどのようにビオトープになっていくかの興味・関心は子ども一人一人持っていたと推測される。園門の近くだったことで幼稚園への登園・降園のたびに子ども達は保護者と共にビオトープの脇を通り、ビオトープの水の中の変化を楽しみに覗く姿が続いた。

造成した時期が冬に近かったこともありビオトープ周辺では思いがけない自然現象との遭遇があった。それは氷の発現である。子ども達の興味・関心は、水の中の世界から氷へと移り変わった。子ども達は毎日登園するたびに氷がはっているか、いないかを楽しみに自分の目で確認するようになる。子ども達にとっては氷の出現は発見そのものであり、氷を通した子ども達の主体的な活動へと繋がった。できた氷を割る、取る、集める、見る、触る、などの直接体験や、また取った氷そのものをあそびの素材として使い、かき氷屋さん、ままごと、土を天ぷら粉に見立てて氷につけた氷の天ぷら作り等、氷の出現でままごとを中心とした遊びが発展し、今まで経験したことのない遊びへと繋がるきっかけとなった。

また、氷そのものの不思議さに気付くきっかけともなった。「氷を触っていると手が冷たいね」「先生！氷を指で持っていたら段々穴が開いてきたよ」「氷を触った後に水を触るとなんで温かいの？」など、氷という物体そのものの不思議さに気付く機会にも恵まれた。

今回のビオトープ造成活動を通して、子ども達は直接植物や生き物、自然事象と触れ合う

体験ができた。また、もともとあった花壇の土を掘り出す体験を造成活動に取り入れる事で、今まで園庭や花壇に自分達が触れる機会がなかった生き物が潜んでいたという事実を知るきっかけともなった。また、砂利を入れたり芝生の斜面を作ったりすることで、生き物の住処への興味も持てたのではないかと推測される。水草があることで隠れる場所になる、芝生の傾斜があることで水と陸を行き来できるなど、実際に造成過程から活動に参加しないと理解が難しかった学びがあったと考える。

今後、水草が増えたり、メダカなどの水生生物が増えていき生態系が作られれていくとが予想される。同時に、毎年氷がはるという自然事象との関わりも予想される。ビオトープを通していろいろな生き物と出会い、見たり触れたりすることにより、命の大切さ・命の尊さ・思いやりの心や安らぐ心が育ち、自然事象に興味・関心を持ってほしいと願う。